

は日蓮大聖人の弟子ではない。日蓮大聖人の弟子に帰りたまえ。

大聖人と

貞観政要（じょうがんせいよう）

山口 範 道

貞観政要とは衆知の通り、不世出と云われる大政治家、唐の太宗の二十四年間の民主政治を記録したものである。

大聖人の政治に関する御指南は三大秘法抄の「王法仏法に冥じ仏法王法に合し」云々の文に在って、之は仏の願業と拜するのである。

ここで云う仏法とは爾前・迹門・文上と簡んで文底三大秘法の南無妙法蓮華経と決定されているが、王法については唯だ政治であると云うだけで莫然としたものがあり現今では未決の段階である。

古今東西の大政治家と云われる方は多く世に出られ、一つの思想をもって世を治定せられているが、当門としては仏法の南無妙法蓮華経なるに對し、王法はその何れを選定するのであるかということにあるが、端的に云へば、王法とは現今の各国与野党の云う国民不在的な政策

でも理論でもなく、大聖人御賢覽の貞観政要による太宗の民主政治の依用ではなからうかと考えるのである。

したがって王法仏法とは、仏法とは本因妙法であり、王法とは未だその底意を究めるには到らないけれども貞観政要を依拠したものでなければならぬと考えるのである。

大聖人は佐渡に身延にと、常に御自写の貞観政要を座右に置かれ、御書にはそれをしばしば引用されて来られたのである。

昭和二十八年八月十五日台湾高雄空港で残ったあの零戦数機を眺め乍ら太平洋戦争終結のラジオを聞いたが、五十年間の日本統治から解放された台湾民族は、その日から「人民のための、人民による、人民の政治」という所謂三民主義を台湾全土の到る処で唱え出したのである。永年国家権力と独裁に支配されていた此の民族の中にも、人間として生きるための権利が平等にあるんだという、その訴えに心を動かされた。その時から人権の尊重、言論の自由ということを今更の如く考え出したものである。

政治は人民のものであり、人権は平等に相互に擁護されるべきものであり、言論の自由は誰人も守り守らなければならぬものであって、かりにも一部の権力者の意

志によって統制が行われるようなことがあってはならないのである。このことは一國はもとより大小の団体にあっててもそうでなくてはならないのである。

今日程民主主義とか、人権尊重のやかましく云われる時代はないが、逆に考えると、反民主主義が根強く国家社会に、又公私の団体に横行し、人権は無視されているが故に、それに対応して、民衆が民衆のための社会と自由を取戻したいがための故に、そういう声が起っているのであるということである。

民主主義を唱える社会の中にあつて、未だ猶一部の権力者達の我ままが罷り通つていふという今日の世に、真の民主主義政道の在り方を教示するのは太宗の政治以外にないものと思うのである。

或大学教授の「坊さん心理学」のところに

「貴族的性格の特徴をあげれば、自分の意見を変へることに苦痛を感じない、反面自分の意見を強引に主張する、おだてに乗りやすい、論理性のないわがまま、嫉妬深い、欲が深く独占的、内心は孤独感を持ち、淋しがりやで腹心の部下をもちたがる、自分が威圧を感じる場所に出ることを避け、自分の意の通るところでは大いに威張る、自己中心的などが挙げられる」(中外)

ということが書かれていた。こういう人が政治権力を

握ったり、団体の指導的立場に立ったりしたりしたら、その社会は反民主主義となり、人権は無視されて大へんなことになる。

今日自由を渴望する庶民のためには、その政治理念に太宗の実践政道を浸透させるのが真の民衆のための王法であると思うのである（もちろん究極は王の妙法帰依ということがその内容でなくてはならない）

太宗の政治！ 貞觀政要の内容については愚論を呈するよりも、その道の權威である訳者原田教授の「貞觀政要」をそのまま引用する以外にその考察も敷衍も全く不要であると思うのである。

十余年前、はじめて貞觀政要に接したが、今は上記の和訳本が出廻っているので、それを一読されるよう各位におすすめる次第であります。

以下は、その本の序文、本文より特に感じた点を引用して、御賢覧の仏意を拝察申し上げ、不世出の大政治家太宗の民主政治の在り方を現代の世代に生きる私達が、どのように之を考え、学びとるかということを考えてみたいと思う。

*

「唐の太宗が人民のための政治家として傑出しているのは、太宗自身が英明な君主であつたばかりでなく、為

政者である太宗の過失をいさめ、政治の得失について意見をのべる役目の諫議太夫を置き、その者達から臣下の直言をよく聞き入れ用いて、常に自身が最善の君主であらねばならないと努力を重ねてやまなかつたというところにある。

古今東西の史上に傑出した政治家と云われる人はいずれも、常日頃下意上達に心勞し、へつらう者を退けて用いず、派閥的な行為はそれが小さいものであつても之を敬遠し、貧しき者、社会の底辺、所謂庶民への配慮を忘れず、つとめて親族縁故者以外のすぐれた者（人材）を要職に起用し、又自身の威嚴や圧力感を人民に感じさせないように努力したものである。

世の指導的地位にある人は、とかく、自己を完全なものと過信し、部下の進言を聞き入れようとしなければかりか、己の意に従わぬ部下を地位階級をもって叱声をあびせたりして威張るものであるが、外部の權威には平身低頭するという權威的性格者が多いのである。

自分にとつては煙たい存在のもの、進んで直言するよな者は遠ざけ、阿諛追従（あゆいついしょう）を事とする愚劣な取り巻きだけを周囲に集めて得意になりたがるものである。そのため、その人はまだ低い地位に居た時は進歩的庶民的であつたのが、高い地位役職についた

とたんに進歩が止ってしまう例が多い。

太宗自身にも考えの足りないところや、過失があったりして、諫臣から手きびしく諫められたが、それをよく聞き入れ用いたことは今の世の指導的立場にある人は見習うべきである。

現在の日本では、民主主義の基本であるからと云って、自由と平等とが誤って強調されている傾向がある。自由においても自己の自由を主張するならば、他人の自由もまた認めて尊重しなければならぬという真の自由の根本を知らないわがままが横行している。

平等も、手離しの平等ではない『人はその権利において平等である』、権利が平等なのであって、内容や能力までもが平等であると云うのではない。

太宗のたった自由平等主義は人間一人一人のための徹底したものであった。(未完)